塔と広場

2022/02/07

　ＮＨＫの講座のみなさまへ　おはようございます。お元気のことと存じます。また、お元気じゃないと困ります。いまや、愛知県や名古屋市では新型オミクロンの新感染者が４６９８名と１６２６名の多きを数えるようになりました。心配です。みなさまには呉々も御身大切、ご自愛専一でお願いいたします。講座へのご出席もご無理なきようお願いいたします。

　さて、今週２月１０日の講座は、バルトークの《青ひげ公の城》の最終回です。前回は、七つある秘密の扉の五つまでが開けられました。残るは二つです。六つ目の部屋は白い湖でした。「これは涙だ」と青ひげ公はいいます。最後の七つ目の部屋には青ひげ公が愛した女たちがいます。三人の女たちが出てきました。数が合いません。「生きているわ。目がくらむほど美しい人たち」とユディットはいいます。「すべての夜はお前のものだ。お前は一番美しい」と青ひげ公はそういってユディットに王冠を被せ夜会服と首飾りで美しく飾り、彼女の手を引いて第７の部屋へと消えていきます。静かに幕が降ります。

　さて、このオペラは悲劇でしょうか？　それとも、ハッピー･エンディングの喜劇でしょうか？　それとも、第三のオペラなのでしょうか？　見終わった私たちは、なにを、どう、感じたのでしょうか？　「彼らはなにものか？」
　それとも、「私たちはなにものか？」　問題を残したままで終わるのも、現

代オペラです。　では、つづいて、ヴェルディのオペラ《イェルサレム》を観ていきましょう。お楽しみに。

都築正道

　ある若いドイツの哲学者がテレビで話していましたー「なぜ人は高層ビルに住みたがるのか？」　なるほど、気になる疑問です。彼は言いますー「それは、日々の闘争から逃れて人々を観察できるからだ。上からの眺めが美しいのは、神のように優越して街を見渡せるからだ。社会を優越できるポジションにいられるからだ」。特に、このコロナ禍においてはそうです。　そういえば、私たちがオペラをゆっくり気楽に楽しめるのも、神のように、高いところから遠く離れて、舞台の上の人々を観察し眺められるからです。でも、古典オペラは時代と所が離れているがために、舞台の上にいる彼らが本当は何を言っているのか、何を求めているのか、いまの私たちにはよく分からないことがあります。近代になると、オペラも、ときには、舞台の上の悩める人物たちは絶えず私たちになにかを訴え続けているので、あまり楽しめないこともあります。現代のオペラは、ときに、私たちに高層ビルから降りるように促します。

　彼らの言い分が分かっても、それが高層ビルにいる私たちの果たす役割であるのかどうかは分からないままでいます。私たちが得た「仕付け（マナー）」では、「オペラ座は行動する場ではない。答えを見つけるための考える場だ」からです。

　とはいえ、いまの時代、何かを考えるのに現代オペラを観るのは良いことです。天空にいて、なにも知らないでいると、偏見や強者の側の考え方にとらわれてしまうので、いつも他者の立場に立って考える機会をもたないでいます。絶えず自ら学ぼうとしないと自分の利己性に気づかなくなります。ゴッホが農民の靴を描くのも、自分の立場に不安を感じたためです。

　もう一人の哲学者ニーアル･ファーガソンは、『スクエア・アンド・タワー』と言う本を出しました。これは高いタワーの上にいて社会から超然としている人と地上のネットで社会と横に繋がっている人とを比べたものです。「階層制組織（タワー）を解消するのは人的ネットワーク（スクエア）だ」というのです。　私たちが、「タワーって、ひょっとして、現代の青ひげ公の城かも知れないな」と思ったなら、オペラもお役に立とうというものです。